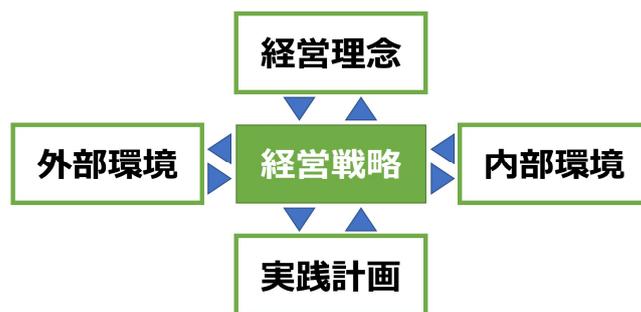


「経営戦略」を考える・その1

企業経営漫談士 岡野実空

内外の「経営環境」を観察し、次に「経営理念」を見直し、さらに「実践計画」の制約などを確認したら、いよいよ本題の「経営戦略」策定にかかります。それは以上を踏まえ、企業が目指す姿に至るまでの長期的な基本設計図。その前半の今回は、まずそれを考える「前提条件」を更新した後、個々の事業における、自社の「立ち位置」と「強み」を考えます。



其の1: 『化革競争』

六本木ヒルズ内にあるハリウッド大学院大学の副学長・寺本義也氏が、30年前に提唱した時代観、「変『化』」と変『革』の競争」を圧縮した四字熟語。「経営戦略」は、そのような「大変」な時代を組織的に生き抜くための脚本でもあります。

前シリーズでは、「グローバル化」「システム化」「ICT・デジタル化」という3つの視点で当時の「変化」を考えました。しかしいまや「三年」どころか「一年一昔」。そこで今回は、最初に「前提条件」を更新してから、その考察に移ります。

まず「グローバル化」に関しては、「古き良き時代」すなわち「国民国家」への回帰願望の増大が顕著です。また「システム化」においては、本来その上位にあるべき「人間性」回復の動きの加速が目立ちます。しかし私たちは、いつの時代にも存在する「懐古」の幻想で、歴史の針を逆転させる訳にはいきません。そこで鍵を握るのが、日進月歩の「科学」。また同時に、「人間性」回復や「地球環境」保護のために、「科学」をいかに活用するかという「哲学」の重要性が改めて浮き彫りになっています。

さてこのような二項対立に臨む「仏教」の基本姿勢は、常に「中道」。それは急激な変化に過剰反応し、とかく行き過ぎになりがちな『改革』の適切な抵抗器です。「神は死んだ」いま、「カネ」や「科学」をその代わりとすることなく、常に「人間」を中心に考え、行動するその教えは、中国、日本を経て、「草木国土悉皆仏性」に進化(退化を含む)し、いま世界の『化革競争』を『協奏』に変える思想となりつつあるのです。合掌!!

其の2: 『喜怒哀楽』

いまや多くの人が知る「スマイル・カーブ」。それは前世紀末、エイサー創業者の故スタン・シー会長が、真逆の「アングリー・カーブ」と共に提唱したサプライチェーンの「付加価値」見取図。それは「デジタル化」の到来で、古来『怒れる』ご本尊(組み立て)が中央で屈み込む一方、それに伴う標準化のおかげで「付加価値」が大幅に上昇し、両端で『喜ぶ』脇侍(部品・素材、サービス)という U 形図。しかし当時、氏が懸命に説く、主役と脇役が入れ替わる「デジタル化」の本質を、真剣に理解しようとする我が国の経営者は実にわずかでした。

以上の事実から得られる教訓は多様ですが、何をおいても「自己を知る」ことの重要性だけは外すことができません。すなわち、自社の「立ち位置」、そこで生み出す「価値」や「強み」の確認ですが、その他は、それを怠ったことの本因、近因、そして遠因から導かれる教訓に他ならないからです。

さて今回の原語『喜怒哀楽』による「苦」や「煩惱」の総称は、私たちが日常的に使う「四苦八苦」。換言すれば、生きている限り私たちに付きまとう、「思い通りにならないこと」です。その中を前向きに生きるために、釈尊は「苦集滅道」という真理を説きました。しかしそれは、「言うは易く行うは難き」道。私たち凡人が人生に疲れたときは、まずひと休みし、AKB48の「365日の紙飛行機」を口ずさんで気分転換しましょう。

「朝の空を見上げて、今日という一日を～(中略)～思い通りにならない日は、明日頑張ろう♪」

2020年3月30日 実空